



稽古に汗だくの割烹
姐さんたち

踊る百万円の樂

あす鹿屋市祇園祭

大賣出しはカラ回り

はりきる踊子は汗ダク

昭和28年7月31日
の新聞記事

【鹿屋】鹿屋市恒例の祇園祭り

はいよくあす一日からひらかれるが、つぎは当日の“百万円のさわぎ”を作る樂屋のぞき

※ ※

○：祇園祭りの前奏曲は商店街の大賣出しから始つた。この人出をあてこむ商店街のソロバンは総売上げ五百万の目標。ところが大詰めにきて業者や商議所をあわてさせたのは、笛吹けど踊らぬ”購買力で、やっきの宣伝もかいたく目標の四割程度の売上げ、原因については、“景品に魅力がない”とあつさり割切るものもあるが、なほほど総売上の三分というわずかの景品。あげくには、会議所の企画性が消極的”とうつつぶんを会議所にぶつつけるしまつ。当の会議所では、ことしは長雨のため農家の菜種、麦の出荷が遅れたので時期的にはずれた”といっている。

○：さてことしの祇園祭りはは百万円の費用。会議所関係の予算が四十万円、北田、本町、

向江、共栄各町の山車が四十四万円、このほか緒雑費二十万円。このうち市補助金二十万を除けばいずれも大賣出しの収入と寄付金で“市民のお祭り”だけに市民の支出も大きい。

○：市内各所の集会所から連日連夜三昧、太鼓の音が流れる。お祭り当日の立役者たちの猛練習である。汗だくなお姉さん、かれんな少女とも三十四度のうだる午後真剣な表情。戦後五年続けて少女山車を出している共栄町の世話役さんは“山車が六万円、踊りの師匠さんかれこれ二、三万円。それに子供を出すには衣装、小道具全部自分持ちで”と細かいところを語っていた。困ったものですわ”とこぼしながらも母親たちが当の子供よりも真剣なんだそう。可哀そうなのは子供たちで、せつかくの夏休みも返上

しての猛ケイコ祭りのすんだあと疲れて病にかかる子供がいるのも例年のならわし。

○：もっとも張切るのは何とんでも割ぼうのアネゴ達。日ごろの腕自慢、姿自慢を發揮するのはここぞとばかりの熱の入れ方。祇園二日目の舞踊の夕はこの姐さんたちにとって、東踊り”“都踊り”に匹敵するわけ。このところ割ぼう界は夏枯れとケイコに出払った姐さんたちで閑散。

○：さきの祇園祭りに色をそえた保安隊鹿屋部隊の音楽隊は、ことしは熊本救援に出払って編成できず、市民を残念がらせているが、土、日曜に当るので手ぐすねひいて外出を待つ隊員の表情はさすがに若い。祭りが台風にぶつつかり…



大賣出し抽選場

鹿屋の祇園祭賑う

【鹿屋】さる三十一日夜の前夜祭から景気つけられた鹿屋市祇園祭りは一日ふたあけ。午前十時向江町八坂神社にみこし山車など全部が集り、みこしを先頭に午後六時まで街をねり歩いたが、ことしは三つの子供みこしが大人たちにまけるものかとあばれ回り趣きをそえ、夜は市内四カ所で舞踊大会が開かれ三万を超える人出をみた二日は演芸コンクール花火大会など行われる。

